



「やられた・・・」

上下2枚の写真は、町内にある家庭菜園。
ある朝、園主が訪れると、手塩にかけて育てた農作物が見るも無残な姿に。

犯人は、イノシシやシカなどの野生動物。
同様の鳥獣被害は、町内のいたる所で耳にします。
そこで本号では、

いま、鳥獣被害を考える。

をテーマに、
私たちが、この課題にどう立ち向かえば良いのかを、探っていきます。



茎の部分を残して
すべて食べられてしまった
エダマメ

その1 鳥獣被害の今

被害の全容は、原因は、私たちの生活への影響は……。志太榛原農林事務所の寺田主査に聞きました。

平成26年度の鳥獣被害額(農作物)

全国

約191億
3386万円

川根本町

約3997万円

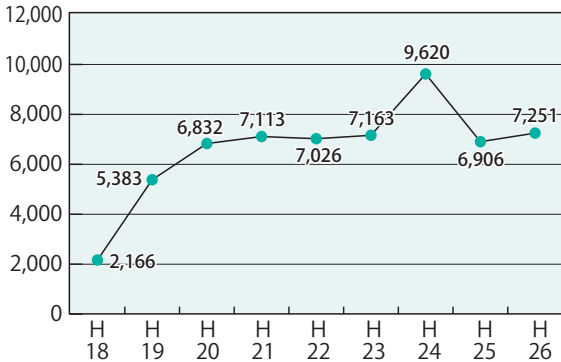
静岡県

約4億
1876万円

▲被害額の報告がない「家庭菜園」などの潜在的被害を考慮すると、実際の金額はさらに多いことが推察される。

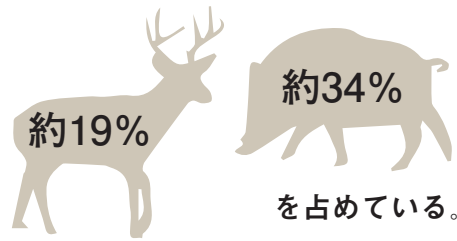
志太榛原地区における鳥獣被害額(農作物)推移

(単位：万円)



動物の種別被害額(平成26年度)では、全国・県内・町内のいずれにおいても、イノシシ・シカが1位・2位を占める。

▼例えば川根本町では・・・
全体の被害額のうち、それぞれ



加えて現代の農業の特徴に、年間を通して栄養価の高い農作物を作ることができるようになった、ということがあります。山中に栄養価の低い食べ物しかない冬季でも、集落では「おいしいエサ」を簡単に手に入れることができてもやれば、動物たちは山から何度でもやってくるどころか、集落近くでも住みつくようになります。また野生動物の栄養状態が良くなることは多産を促進し、個体数の増加へとつながります。

収穫前の農作物を食べられてしまうことは、農家の皆さんにとって経済的損失だけでなく、営農意欲の低下という精神的ダメージをもたらします。また農業以外にも、枝葉の食害や樹皮のはぎ取りなどといった林業への被害、車両との接触、食害に伴う土壌荒廃による土砂災害の懸念、大型動物との遭遇による人的被害、マガニなどを介して野生動物から人間へと感染する「人獣共通感染症」など、多方面への影響も見られます。どのように野生動物と向き合っていくのかは、農業関係者だけでなく、多くの皆さんにも考えていただきたい課題なのです。

長い歴史で見れば、近現代より闘ってきた。農山村でも人口が増加したことで一時的に被害の少ない時代もありましたが、現在は再びこころした地域での人間活動の減少や生活エリアそのものが縮小する時代となりました。これにより野生動物の生息域も拡大し、鳥獣被害という古くからの地域課題が再浮上してきたのが、今の状況だといえます。

「野生動物の生息域拡大は多方面に影響を与えています」

静岡県
志太榛原農林事務所
地域振興課

寺田 真子 主査

